



倉重光則、二度目のステップスギャラリー個展である。前回は映像であったが、今回、ギャラリー内に様々な素材を用いた中型の作品3点、事務所と入り口に4点展示した。倉重は2012年KOKIARTSで「絵画」を発表し話題となる。

ギャラリー内は《欲望の海を渡る絵画「ふるえる空間」》(アクリル/キャンバス)《不確定性正方形「精神は新鮮な空気を呼吸する」》(鉄/ネオン管)《不確定性正方形「触れることのできぬ現実」》(鉄/ガラス/ネオン管)といった具合に、全く異なる素材と技法を用いている。

それでも素材が全く気にならない。倉重のモチーフである内と外の境界線が強烈に見る者に迫ってくる。描かれた線、区切られた形、何もない内部を支えるのは、万物の根源を成し遂げる形と大きさという極めてシンプルなあり方だ。

画廊内《不確定性正方形「触れることのできぬ現実」》の裏側の事務所に、《ガス状の不確定性正方形》(鉄/ガラス/ドローイング/ネオン管)が位置する。倉重は内と外だけではなく、表と裏すらも転覆させた。事務所が画廊になる。

事務所と入り口の作品は《暗い明日を考えながら笑う》、《空虚な内実》、《黒い沈黙》と、いずれもアクリル/キャンバスである。ここにある指の動きから倉重の筆致を見出すことも正しい。しかし私は飽くまで境界を感じる。

見えない境界線が、ありとあらゆるところに張り巡らされている。邪悪な境界線に触れて一線を越えるとすぐに我々は自由を削がれ、尊厳を失われ、奴隷に平伏してしまう。作品のタイトルにその危惧を感じるのは私だけではない。

倉重はこの現実の境界線に脅威を感じ、それ以上に人間の根底に迫る境界線を自らが生み出す。そこに入っただけではない場所を自身が形成する、何というハードルの高さ。作品の境界線は現実と化し、現実の境界線を無化しようとする。これこそ第一次世界大戦時に生まれた現代美術である。

すると我々は、境界線に恐れおののく必要がなくなる。境界線の内部に入るか入ってしまったかではなく、境界線そのものの存在を認識し、それが一体何者なのかを知っていれば、たとえ取り込まれてしまったとしても脱出は可能だ。

これは政治的なメッセージにも読めるが、神を失った人間が人間としての尊厳を保ち、自由に生きようとする意志であるという、近代人が担った課題でもあるということができよう。我々は生きる闘争を続けていかなければならない。

すると倉重が絵画を描き始めた理由も容易に理解することができる。私達は描くのではなく、常に線を辿っている。それは視線でもある。辿るのは今まであった線なのか、これから生み出す線なのか。それを選択するのは貴方である。

